

目次

版下作成の方針……iv

- 1 落語と速記と録音と……1
- 2 言語資料として見た速記本『談佐牡丹燈籠』における二重性……7
- 3 鶴見大学図書館蔵『談佐牡丹燈籠』別製本について——その書誌的紹介ならびに初版本との語法上の相違点……33
- 4 東京落語資料の問題点若干——十九世紀末～二十世紀初頭の東京口語文法研究のために……65
- 5 速記は「言語を直写」し得たか——若林珪蔵『速記法要訣』に見る速記符号の表語性……80
- 6 円朝速記本と言文一致……94
- 7 文章語の性格……110
- 8 録音資料の歴史……127
- 9 快楽亭ブラックと平円盤初吹込……140
- 10 今世紀初頭東京語資料としての落語最初のレコード……154
- 11 快楽亭ブラックの日本語の発音……171
- 12 二十世紀初頭の東京語子音の音価・音訛——落語レコードを資料として……182
- 13 二十世紀初頭の東京語母音の音価・音訛——落語レコードを資料として……203

14	二十世紀早期の演説レコード資料群に聴く合拗音の発音……………	220
15	東京語の録音資料——落語・演説レコードを中心として……………	235
16	最も早い日本語録音資料群の出現——一九〇〇年パリにおける川上音二郎一座の平円盤録音……………	256
17	一九〇三年二月録音の東京落語平円盤資料群について……………	264
18	一九〇〇年～一九〇一年に欧州で録音された日本語音声資料群……………	279
19	欧米の録音アーカイブズ——初期日本語録音資料所蔵機関を中心に……………	301
20	一九〇〇年パリ日本語録音資料の概要と吹込者の特定……………	311
21	一九〇〇年パリ日本語録音資料の発音・語法上の特徴……………	337
22	一九二三年にパリで録音された上田万年による『天草版平家物語』の解説と朗読——フランス国立図書館所蔵一九二〇年代日本語録音資料群……………	362
	解説 清水康行先生の学問 鈴木広光……………	375
	校訂付記……………	391
	初出一覧……………	393

1 落語と速記と録音と

落語の口演は、演者と同じ時間と空間を共有する聴衆のみが、その時間と空間において享受し、その場で消えていく。定まった脚本も無いので、その言葉の残滓さえ、時空を共に出来なかつた者は読むことは出来なかつた。それが、十九世紀末に実用化された速記法と録音技術とによって、共に話芸の全容は伝えられないながら、落語家の語った言葉が、それなりの忠実さで残されるようになった。それらのおかげで、百年以上も後の我々までも、明治の名人たちの話しぶりを知ることが可能となっている。

落語速記本の嚆矢が、日本語速記の開祖・田鎖綱紀に学び、我が国最初の速記事務所「速記法研究会」を立ち上げた若林珪蔵と酒井昇造とが当代落語界の第一人者・三遊亭円朝演ずる人情噺を速記した『怪談牡丹燈籠』（一八八四年）であることは、本巻の読者諸賢には周知のことであろう。

『牡丹燈籠』の成功を受け、『塩原多助一代記』『業平文治漂流奇談』（共に一八八五年）などの円朝速記本が次々に刊行され、『やまと新聞』創刊を飾った円朝の『松の操美人の生埋』（一八八六年）以下、新聞連載物も続き、さらには、『百花園』（一八八九年創刊、一九〇〇年終刊）をはじめ、落語速記を中心とした雑誌も発刊され、落語速記の全盛時代を迎えることとなる。

2 言語資料として見た速記本『佐牡丹燈籠』における二重性

三遊亭円朝（一八三九—一九〇〇）の最初の速記本『佐牡丹燈籠』（一八八四（明治一七）年刊）は、或いは、二葉亭四迷や山田美妙などの初期の言文一致運動に強い影響を与えたという点において、或いは、明治期東京の落語家・円朝の口演が速記という実際の高座をよく写したことが期待されるかたちで残されているという点において、文学史上、芸能史上、国語史上の主要な資料として、様々な面から注目され、利用されてきている。しかし一方で、この速記本資料の言語資料としての価値・性格に関しては、未だ、充分に具体的な調査・解明がなされているとは言いがたいのが現状であろう。

本稿は、そうした現状において、この速記本『牡丹燈籠』の言語資料性を考える手がかりとして、この資料がもっているであろう言語資料としての様々な二重的性格（特に高座口演と速記本文、章との二重性）をふまえた上で、この速記本全編における主に文体的な不統一を指摘し、それを、この資料的二重性との関連において、とらえていこうとするものである。なお、本稿での『佐牡丹燈籠』の底本には、原装複製本（文献16）¹を用いた。

3 鶴見大学図書館蔵『^佐牡丹燈籠』別製本について

——その書誌的紹介ならびに初版本との語法上の相違点——

本稿は、鶴見大学図書館蔵『^佐牡丹燈籠』別製本を書誌的に紹介し、あわせて、主に『初版本』との語法上の相違点について述べるものである。なお、比較に用いる『初版本』の底本には近代文学館の複製版、『五版本』の底本には鶴見大学図書館蔵本を使用した。

一 一

三遊亭円朝演述・若林珪蔵筆記の最初の落語（人情噺）速記本『^佐牡丹燈籠』の刊本としては、全一三編・分冊形式の和装本である『初版本』と、全一冊でボール表紙洋装本の『再版本』と『五版本』とが、一般に知られている。

『^佐牡丹燈籠』は、まず、一八八四（明治一七）年七月から同年十二月にかけて、全一三編の分冊形式で、東京稗史出版社から、順次、出版された。これを、本稿では『初版本』と称することとする。なお、今日では、この『初版本』には原装複製本（¹）があり、本稿では、この複製本を『初版本』の底本として用いた。

ここで、後に紹介する『山本本』や『鶴見本』との比較の便宜のため、『初版本』の特徴を、いくつか、箇条書きにして示しておく。

4 東京落語資料の問題点若干

——十九世紀末～二十世紀初頭の東京口語文法研究のために——

はじめに

十九世紀後半から二十世紀にかけての（明治期）東京口語資料として期待さるべき当時の東京落語資料としては、その口演を速記し活字文章化した速記資料群と、レコードに録音記録したレコード資料群とが、現在に、知られてゐる。

有名な三遊亭円朝演述・若林珥蔵速記『佐談牡丹燈籠』の刊行（一八八四年）を嚆矢に、単行本・新聞・雑誌に数多く残された落語速記資料群の方は、言文一致運動とのからみもあり、円朝物を中心に、それらを分析・利用した諸論考が見られるが、未だ十分に調べられているとは言い難い。一方、十九世紀末の蠟管録音に続き、一九〇三年より録音・製作されていた落語最初期平円盤レコード資料については、私による概括的紹介（文献②）がある他は、言語資料として殆んど利用されていない①のが現状である。

最近、私は、これらの資料群を用いた（明治期）東京語の調査・分析を試みつつあるが、未だ、十分に体系的な記

5 速記は「言語を直写」し得たか

——若林珥藏『速記法要訣』に見る速記符号の表語性——

一 「言語を直写」する速記法

日本の速記界の草分けの一人である若林珥藏⁽¹⁾は、自らが速記した初の人情噺本・三遊亭円朝演述『恠談牡丹燈籠』(東京裨史出版社、一八八四年)⁽²⁾の「序詞」において、自らの速記法が「言語を直写」し、説話の「片言隻語を誤らず」に文章化するものであると、繰り返し、強調する。

文字能く人の言語^{げんご}を写すと雖も、只其意義を失はずして之を文字に留むるのみ。其活潑なる説話の片言隻語を洩らさず之を収録して文字に留むること能はざるは、我国に言語直写の速記法なきが為めなり。予「…」一の速記法を案出して「…」遂に言語を直写して其片言隻語を誤らず、其筆記を読んで其説話を親聴するの感あらしむるに至りし「…」予が速記法を以て其説話を直写し、之を冊子に為し「…」円朝子が演ずる所の説話を其儘に直写し、片言隻語を改修せずして印刷に付せしは、即ち此怪談牡丹燈籠なり「…」所謂言語の写真法を以て記したるがゆゑ、此冊子を読む者は亦寄席に於て円朝子が人情話を親聴するが如き「…」我が速記法の功用の著大なるを

6 円朝速記本と言文一致

一八八四（明治一七）年の『怪談牡丹燈籠』に始まる一連の円朝速記本の出版が、二葉亭四迷や山田美妙らによる言文一致体小説の誕生に大きな影響を与えたというのは、既に神話化された話である。ただし、そのことを、具体的な語法・文体のレベルで実証するのは甚だ困難な課題である。本稿も、そうした方向での例証は語れずに、神話の周辺を徘徊するばかりのものとなることを、予め断らざるを得ない。

一 若林珪蔵の「遠大の目的」

最初の円朝速記本『怪談牡丹燈籠』巻頭に筆記者（速記者）・若林珪蔵⁽¹⁾が識した「序詞」は、以下のように締め括られている。

但其記中往々文体を失し抑揚其宜きを得ず 通読に便ならざる所ありて尋常小説の如くならざるは 即ち其調を為さざる言語を直写せし速記法たる所以にして 我國の説話の語法なきを示し 以て将来我國の言語上に改良を加へんと欲する遠大の目的を懷くものなれば 看客幸ひに之を諒して愛読あらんことを請ふ⁽²⁾

7 文章語の性格

一 はじめに

「言文一致」の理想を、「言」、即ち、「話しことば」と、「文」、即ち、「書きことば」との完全な一致、つまり「話すがまま」に書かれた文章の完成とみるならば、近代の言文一致運動は、失敗に終わっている。そこで生み出された新しい文体は、そして現在、私たちが言文一致体として用いている文体は、けっして「話すがまま」の文章とはなっていない。それは、むしろ、日常の「話しことば」の世界とは離れた、独自の新しい「文章語」の創出の過程であった。

この、日本語の文章史上、注目すべき実験が行われ、その後の文章語を転換する画期となった、言文一致運動において、何が問題となり、何が創られたのかを考えることは、日本語の「文章語の性格」を考える上での、いくつかの重要な問題を照らし出すことになるだろう。以下、しばらくは、そうした観点から、初期の言文一致論の周辺を追ってみることにしよう。

8 録音資料の歴史

1 錫箔式円筒蓄音機の発明

一八七七年、アメリカの発明王トマス・A・エディソンは、最初の録音再生装置を発明した。フォノグラフ (phono〈音〉+ graph〈記録するもの〉) と名付けられた、この機械は、音による空気の振動を針先の震えに変え、回転する円筒軸に巻いた錫箔に深淺の刻みをつけて記録し、再生時には、逆に錫箔の凹凸を針先で拾い、空気を振動させて再生する仕組みになっていた。空気振動と針先の振動との間で物理的に情報をやり取りするという本機のアイデアは、記録媒体が箔から円管・円盤へと移り、振動方向も縦刻みから横揺れに代わり、後には電気信号による増幅を利用するようになる等するものの、LP時代に至るまで、長く受け継がれていく。

同年末に示された特許出願書には、次のような用途が示されている(山川(一九九二)一一頁の訳による)。録音再生装置の基本的な用途が網羅されているといつてよからう。

- 1 速記者を使わないで手紙を書いたり、各種の口述に使える

9 快樂亭ブラックと平円盤初吹込

横浜外人墓地の一角、正門から右手に少し下ったところに、十字架型の石造の墓碑が立っている。墓碑は十字架と上・中・下三段重ねの方形の台座からなり、その前には、別に巻物を開いた形の墓碑が置かれている。三段の台座の正面には、それぞれ、次のような字句が刻まれている。

- ① 上段：IN LOVING MEMORY OF JOHN REDDIE BLACK / BORN JAN 8 TH 1927 / DIED JUNE 11TH 1980
 中段：AND HIS DEARLY LOVED WIFE / ELIZABETH CHARLOTTE / CALLED HOME OCTOBER 7 1922
 下段：ALSO / HENRY JAMES / THEIR ELDEST SON / DIED 1923 AGED 66
 また、前方の墓碑には、

- ② ELIZABETH PAULINE / BLACK / BORN 25 TH JULY 1869 / DIED 8 TH JUNE 1945 / IN TOKYO
 という字句がみえる。

これが、明治初期の新聞『日新真事誌』の編集・発行者、ジョン・ブラックとその家族の墓である。そして、ジョンの長男として同じくここに眠る、ヘンリー・ジェイムズ・ブラックこそ、“変な外人”（最近では聞かなくなったことばだ。）タレント第一号ともいえるべき、英国人落語家・快樂亭ブラックその人である。

10 今世紀初頭東京語資料としての落語最初のレコード

本編は、今世紀初頭に吹き込まれた落語最初期平円盤レコードについて紹介し⁽¹⁾、その言語資料、特に東京語資料としての利用価値と可能性について述べるものである。

一

一九〇三（明治三六）年一月一日、極東録音遠征中のF・ガイスベルクをはじめとする英国グラモフォン社の一行が、横浜に上陸した。彼等は、当時活躍中の英人落語家・快樂亭ブラック（ヘンリー・ジェイムズ・ブラック、石井ブラック）（一八五八一—一九二三）⁽²⁾の協力の下、約半月の下調べの後、二月初旬から三月初旬にかけて、東京築地のホテル・メトロポールの一室を録音場所に、当時の様々なジャンルにわたる日本芸能を録音していった。これが、日本での平円盤レコード初吹込と思われる⁽³⁾。

一方、同年暮には、銀座・天賞堂が次のような新聞広告を出している。

11 快樂亭ブラックの日本語の発音

今秋、一九八五年九月一九日、英人落語家・快樂亭ブラックことヘンリー・ジェイムス・ブラック（日本帰化名・石井貌刺屈^{ブラック}）の六十三回目の命日にあたるこの日、森岡ハインツ・佐々木みよ子両氏達の尽力で新たに墓前に建立されたブラックの顕彰碑⁽¹⁾の除幕式を含む、第一回の「快樂忌」が、彼の眠る横浜山手外人墓地と近くのゲーテ座を会場に行なわれた⁽²⁾。この模様は新聞やテレビでも報道されたので、あるいは御記憶の読者もいらっしゃるかも知れない。

ブラックは、異色の「青い目の落語家」として芸能界で活躍し、数々の注目すべき活動をしたが、晩年には殆んど忘れられた存在となり、死後、最近ようやく再評価されつつある⁽³⁾。今度の墓碑建立と「快樂忌」が、より多くの人々に彼の存在が認められるきっかけになれば喜ばしいことだ。

彼の演じた噺はいくつかの速記本・雑誌に残り、また、彼の吹き込んだレコードも数点ある。そこに残された言葉、このオーストラリア生まれの英人⁽⁴⁾ブラックが習得し駆使した日本語を探ることは、英語を母語とする二言語使用者⁽⁵⁾の持つ日本語の有様をみる試みでもあり、また、当時の日本語（特に東京口語）の姿を浮き上がらせる試みともなろう。

12 二十世紀初頭の東京語子音の音価・音訛

——落語レコードを資料として——

本稿は、二十世紀初頭に録音された東京落語平円盤レコードを主資料として観察される、当時の東京語⁽¹⁾の音声の状態、とくに子音の音価・音訛について、述べるものである。

一 調査資料・対象

本稿で利用した、落語最初期平円盤レコード資料群の概要については、既に「文献10」で紹介してあるので、ここでは繰り返さない⁽²⁾。一言でいえば、東京口語資料として、我々が現実的に利用しうる、最古の音声としての音声言語資料群を構成しているものである。

本稿では、調査対象を、平円盤レコード最初の吹込時期である一九〇三（明治三六）⁽³⁾年から輸入盤時代の最後といえる一九一一（明治四四）⁽⁴⁾年までに録音・発売された、東京落語家所演のレコードに限った。

年代を区切ったのは便宜による。年限を拡げるのは、二十世紀初頭の共時的状態の記述の目的を損う可能性がある。狭めすぎは資料不足を生む。よって、ほぼ二十世紀の最初の十年にあたり、また、録音年の特定に比較的不利な

13 二十世紀初頭の東京語母音の音価・音訛

——落語レコードを資料として——

本稿は、二十世紀初頭に録音された東京落語平円盤レコードを主資料として観察される、当時の東京語⁽¹⁾の音声の状態、とくに母音の音価・音訛について、述べるものである。

一 調査の対象・方法

本稿で調査対象として利用した資料、調査の方法・手順は、前に発表した「文献14⁽²⁾」と基本的に同じである。

調査対象としたのは、一九〇三（明治三六）年から一九一一（明治四四）年までに録音・発売された、東京落語家所演の、落語最初期平円盤レコード資料群⁽³⁾のうち、私がこれまでに、その録音を採録・調査しえたもの。

初代（三代目）三遊亭円遊（二八四九—一九〇七）、四代目柳亭左楽（二八五六—一九一一）、三代目柳家小さん（二八五七—一九三〇）、六代目朝寝坊むらく（二八五八？—一九〇七）、初代三遊亭円右（二八六〇—一九二四）、四代目橋家円藏（二八六四—一九一四）、三代目蝶花楼馬楽（二八六四—一九一四）、四代目橋家円喬（二八六五—一九一二）、初代柳家小せん（二八八三—一九一九⁽⁴⁾）の所演による、（レコード片面につき一点とすると）約七〇点、

14 二十世紀早期の演説レコード資料群に聴く合拗音の発音

本稿は、二十世紀早期に録音された演説レコード資料群に聴かれる合拗音の発音を調査したものである。

一 二十世紀早期の演説レコード資料群について

二十世紀の早い時期から残されるようになる政治家・文化人の演説・講演レコード資料群（以下、演説レコードと総称。本稿では、一九一五～四〇年録音盤を対象を限定⁽¹⁾）は、当時の音声言語を記録した資料として、国語史上、興味ある資料群である。

演説レコードは、同時期の音声言語資料群である東京（ないし上方）落語レコード資料群と比べ、その言語資料的性格に違いがあることは、すでに別稿で指摘した⁽²⁾。

東京落語レコードでは、その芸能形態上、市井の日常会話に近い言語が聴かれる。吹込者である落語家は、東京の庶民層出身者が多く、学歴も高くないのが普通である。ここから、当時の東京方言的な日常言語を記録した録音資料として期待できる。

15 東京語の録音資料

——落語・演説レコードを中心として——

一 言語史資料としての録音資料

十九世紀末以降の言語・言語史研究が、それ以前と決定的に異なる点の一つに、録音資料が利用できるようになった点がある。

一八七七年のT・A・エディソンの錫箔円筒式蓄音機発明以来、音声を音声として記録し再生することが可能となった。そうした録音には当時の人々の口頭語も含まれ、言語研究の資料ともなり得る。これらの録音資料は、装置の拙劣さによる精度上の問題はあるとしても、文献からの推定と異なり、当時の音声言語の姿を音声として聴取し分析できる利点を持つ。

次に述べるように、日本語・東京語に関しても、そうした口頭語資料となる録音が比較的早い時期から行われている。以下、言語資料として注目される録音に言及しつつ、日本での録音の歴史を簡単に振り返っておこう^①。

エディソンの発明の翌年、一八七八年、東京大学の御雇外国教師J・A・ユーイングが蓄音機を製作、公開す

16 最も早い日本語録音資料群の出現

——一九〇〇年パリにおける川上音二郎一座の平円盤録音——

一 最古の日本語録音資料群

これまで、日本における平円盤（ディスク式レコード）録音の最初は、一九〇三年二～三月に、F・W・ガイスベルクら英国グラモフォン社（以下、G社）⁽¹⁾ 一行が東京で行なったものと、思われていた⁽²⁾。その際に録音されたものの多くは伝統的な音曲類であるが、東京落話の録音も少なからず含まれており、これらが、現実的に利用できる最古の日本語口語録音資料であると考えられてきた⁽³⁾。

ところが、今般、それより三年近く早く、一九〇〇年八月頃に、G社が、パリ万博に出演中だった川上音二郎一座の演芸を録音しており、そのSP盤が現存することが明らかになり、昨年暮れ、それらの録音を収めたCD『甦るオッペケペー——1900年パリ万博の川上一座——』⁽⁴⁾「J・スコット・ミラー発見のベルリナー盤による」⁽⁵⁾（「企画」J・スコット・ミラー、〔監修・解説〕都家歌六・岡田則夫・山本進・千野喜資、東芝EMI、TOCG-5432、一九九七年一二月一七日発売）が、企画・監修者達による詳細な解説（以下、『解説』）を添えて、公にされた⁽⁴⁾。

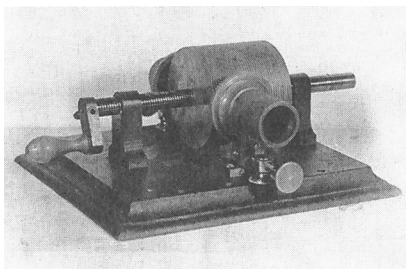
17 一九〇三年二月録音の東京落語平円盤資料群について

本稿は、一九〇三年二月、東京で、英国グラモフォン社（以下、G社）によって録音された本邦最初のディスク式（平円盤）録音資料群⁽¹⁾（以下、本録音）に含まれる東京落語資料群（以下、本資料群）の概要について紹介するものである。

一 本資料群の録音時期と録音時間

一 一 録音時期

旧稿・清水（一九八一）において、私は、本録音を行なった Fred W. Gaisberg（以下、ガイズバーグ⁽²⁾）の回顧録（Gaisberg (1947)）記事と当時の英字新聞に載る来日外国人情報とを照合した結果、G社一行が、一九〇三年一月一六日に横浜に到着し、二月初めに東京に移動、二月五日から三月七日まで東京・築地のホテル・メトロポールに滞在、この東京滞在期間中に録音活動を行なったと考えられることを示した（清水（一九八五）で、別の英字新聞記



【図 1】 エジソンの錫箔蓄音機

18
一九〇〇～一九〇一年に欧州で録音された日本語音声資料群

1. 録音再生装置の開発

「1」 錫箔式円筒蓄音機

一八七七年、アメリカの発明王トーマス・エジソン [Thomas A. Edison] が、最初の録音再生装置を発明した【図1】。

フォノグラフ (Phonograph=phono〈音〉+ graph〈記録するもの〉) と名付けられた、この機械は、音による空気の振動を針先の震えに変え、回転する円筒軸に巻いた錫箔に深淺の刻みをつけて記録し、再生時には、逆に錫箔の凹凸を針先で拾い、空気を振動させて再生する仕組みになっていた。空気振動と針先の振動との間で物理的に情報をやり取りするという本機のアイデアは、媒体が箔から円管・円盤

19 欧米の録音アーカイブズ

—— 初期日本語録音資料所蔵機関を中心に ——

筆者らは、この数年来、蠟管等、19世紀末から20世紀初頭にかけての初期録音資料群の音源保存・音声復元・内容分析を目指した研究プロジェクトを展開している⁽¹⁾。本稿は、その過程で所蔵状況調査や意見交換のために訪れた、そうした初期録音資料群を所蔵する欧米の録音アーカイブズ⁽²⁾のうちの幾つかを紹介するものである。

数年にわたる調査に基づくため、以下で示す内容は、必ずしも最新の情報になっていないことを予めお断りする。また、これらの機関の多くは図書館・博物館等に所属している⁽³⁾ので、それらの図書館等に関わる事柄も、余談として、少々、触れていくこととなる。

1. 録音再生装置の発明と、その学術的利用

次章以降で、各録音アーカイブズを紹介する前に、録音再生装置の発明と、その学術的利用の始まりに関して、簡単に述べておく。

20 一九〇〇年パリ日本語録音資料の概要と吹込者の特定

1. 一九〇〇年パリ人類学会による日本人の吹込み録音

一九〇〇年パリ万国博覧会の開催を期に、パリ人類学会 (*Société d'anthropologie de Paris*) が、同地を訪れた世界各国の人々を吹込者として、世界の諸言語を録音する「録音博物館」 (*Musée phonographique*) を企画・実行したことは、第1部で述べた通りである。

この中に、日本人によって吹き込まれた録音が、蠟管14本分、残されている。録音時間は各1分〜2分半程度で、録音・保存状態は概ね良好である。

連続する整理番号194〜207 (以下、同番号は斜体で示す…うち198・199・201の3点は内容を2つに分けて記録。207は他と同様の様式での記録台帳が無く、手書きメモのみ残る) を持つ、これらの録音について、記録台帳に記された情報を示すと「表1」のようになる。なお、各欄で、空白となっているのは情報が書き込まれていないもの、「/」は前の段と同内容であることを示す。また、録音内容欄での「」は、記録台帳に無い情報を筆者が補ったものである。

21 一九〇〇年パリ日本語録音の発音・語法上の特徴

本章では、一九〇〇年パリ日本語録音に関し、そこに窺える発音・語法等の言語的な特徴について、いくつかの検討を試みていく。

1. 「放蕩息子」朗読の方言差

一九〇〇年パリ日本語録音中、194～198には、4人の異なる吹込者による新約聖書ルカ福音書・第15章中の「放蕩息子の帰還」の朗読が収められている（うち195は音節区切り読み）。

この録音企画の関連文書資料群の中に、手書きローマ字による「放蕩息子」日本語本文のメモがあるが、これは、録音内容の聴き取りの際に用いたものらしく、ところどころ、フランス語による注記が見られる。

朗読用のテキストとした本文は、このローマ字版ではなく、「図1」に該当部分を掲げた『印照新約全書』（大日本聖書館、一八九九）、あるいは、これと同じ字組・行組のものかと思われる（1）。

194～198の朗読内容は同書の本文と同じで、かつ、195に起こる読み飛ばしは同書210頁の後ろから2行目の丸々1行分

22 一九二三年にパリで録音された

上田万年による『天草版平家物語』の解説と朗読

——フランス国立図書館所蔵一九二〇年代日本語録音資料群——

キーワード…録音資料、上田万年、『天草版平家物語』、フランス国立図書館、大英博物館

二〇一四年末に、フランス国立図書館 (Bibliothèque nationale de France : 以下、B n F) が公開した電子展示会『フランスと日本 ひとつの出会い 一八五〇―一九一四』(<http://expositions.bnf.fr/france-japon/>)⁽¹⁾には、同館が所蔵する日本語録音資料を紹介する「音源資料 Documents sonores」(<http://gallica.bnf.fr/html/und/asia/documents-sonores>)というサイト⁽²⁾が設けられ、一九〇〇年から一九四〇年代にかけて、同国を訪れた日本人が吹き込んだ日本語録音が、内容音声だけではなく、解説(仏語。日本語訳も付く)や記録台帳等の関連資料と共に、幾つか掲げられている。

この中の“Enregistrements à l'Exposition universelle de 1900”と示された子サイトには、現存最古の日本語録音資料群と思われる一九〇〇年パリ万博時での録音が、全14点、含まれる。これまで、一般には聴取が難しかった同資料群が、インターネット上で、自由に聴くことができるようになったのは、有難いことである⁽³⁾。

また、“Disques 78 tours enregistrés par les Archives de la Parole…”という方には、一九二〇年代に、ソルボンヌ

解説 清水康行先生の学問

鈴木広光

本論文集は二〇二四年四月に逝去された日本女子大学名誉教授清水康行先生の研究業績のうち、速記および録音資料による近代日本語研究に関する論考をまとめたものである。テーマの絞り込み、論文の選択と配列、『速記と録音と日本語の近代』という書名は編集に携わった小柳智一、山東功、鈴木広光の合議により決定された。

*

清水康行先生の残された業績をまとめた論文集を編むにあたり、まずテーマを近代における日本語と速記・録音という新たな記録方法との出会いに絞り込んだ理由を明らかにしておきたい。じつは先生は録音資料による日本語研究をテーマにした著書を執筆するために作成されたかと思われる論文リストを残されていた。日付がないため、いつの時点のものは判然としないが、後述する研究報告書以前のものではないかと推測される。そのリストの範囲を越えて、速記資料に関連する論考まで含むテーマを選択したのは、編集に携わった三人の判断によるものであり、先生のご遺志にもとづくわけではない。そこで、以下に先生の学問の足跡を辿りつつ、本論文集のテーマに絞り込むまでの経緯を示すことにしたい。

ごく初期の文法関係の論考を除くと、先生は一貫して近代日本語の研究に従事された。明治以降の日本人は、普通教育の導入やマスメディアの発達などにより日本語との関わり方が従来から大きく転回する事態に直面した。さらに